

## 依他起性，無自性，無常

池田道浩

一 問題の所在 『大乘莊嚴經論』「述求品」では以下のような文脈で諸法の無自性が説かれ、依他起性の「生無自性<sup>1)</sup>」が示される。

無自性を求めることに関して二つの偈がある<sup>2)</sup>。

それ自体で (svayam), それ自体の本体として (svenātmanā) 存在しないから, また, 自性として存続しないから, また, 把握した通りにはそれは存在しないから無自性性 (niḥsvabhāvatva) だといわれる。(第50偈)

それ自体では存在しないから無自性性であるのは、諸法は縁に依存するものだからである。それ自体の本体として存在しないから無自性性であるのは、既に滅したものはそれ自体の本体として不生であるからである。自性として存在しないから無自性性であるのは、刹那滅たるものだから (ksanikatvād) である。このように三種の無自性性は有為の三相に随順する (saṃskṛtalakṣaṇatrayānuga) と知るべきである。また、把握した通りにはそれは存在しないから無自性性であるという、「それは存在しないから」とは自性 [が存在しないから] である。ちょうど、凡夫が自性を把握しても、或いは常楽浄我であるように、或いは遍計所執の相によるように、このように自性は存在せず、故にまた、諸法は無自性性だといわれるのである。

無自性性によって、後のものが後のものの依り所になるから、不正不滅、本来静寂、自性涅槃が成立する。(第51偈)

無自性性によって不生などが成立する。なぜなら、およそなんであれ無自性であればそれは不生であり、なんであれ不生であれば、それは不滅であり、なんであれ不滅であればそれは本来寂靜であり、なんであれ本来寂靜であればそれは自性涅槃だからである。このように後のものが後のものの依り所になるという無自性性などにより、無自性性によって不生などが成立するのである (Lévi ed. pp. 67<sup>b</sup>-68<sup>a</sup>)。

諸法は縁起しており刹那滅であることから無自性とされる。そして、第51偈ではその無自性を理由に「不生不滅、本来寂靜、自性涅槃」が帰結される。ここには「生滅」→「無自性」→「不生不滅」という論理が展開されている。しかし、「生滅」と「不生不滅」は矛盾する概念である。ここには「生滅」を理由に「不生

不滅」が説かれるという奇妙な見解が示されている。本稿は依他起性の生無自性の根拠である「生滅」について若干の考察を行うものである。

二 無常に関する『菩薩地』の見解 先の記述における無自性の根拠は「縁起、生滅、刹那滅」であるが、これらが「無常」と本質的關係にあることは論をまたない。『大乘莊嚴經論』「菩提分品」第81偈に対する Vasubandhu の注釈には「無常の意味とは他依起性からすれば刹那滅という意味である<sup>3)</sup>」と説かれている。瑜伽行派が「無常」を遍計所執性と依他起性との二つの観点から解釈していたことや瑜伽行派における刹那滅の問題については既に早島理氏による多くの業績<sup>4)</sup>や、A. von Rospatt 氏<sup>5)</sup>、谷貞志氏<sup>6)</sup>による御研究が積み重ねられている。本稿では『菩薩地』「菩提分品」の記述を問題にしたい。そこには「諸行無常」について次のように述べられている。

また、菩薩はどのように一切の諸行は無常であると正しく観察するのか。ここで菩薩は一切の諸行に①言説の自性 (abhiilāpya-svabhāva) はいかなる時にも存在しないと体得して一切の諸行は無常であると観察する。さらに、他ならぬその②不可言説の事物を正しく了知せず、[その際の] 了知しないことを因として [不可言説の事物の] 生滅を獲得し、③不可言説を自性とするそれら一切の諸行は無常であると正しく観察する (aparijñatasya\* bhūtatas tasyaiva nirabhiilāpyasya vastunah aparijñāna-hetukam\*\* udaya-vyayam upalabhya tān\*\* \*nirabhiilāpya-svabhāvān sarva-samskāraṇ anityataḥ samanupaśyati) (Dutt ed. p. 188<sup>16-20</sup>, Wogihara ed. p. 277<sup>16-22</sup>, \*Dutt ed. “avijñātasya”, \*\*Wogihara ed. “aparijñāta”<sup>0</sup>, \*\*\*Wogihara ed. “upalabhyate”, cf. Rospatt, *op. cit.*, pp. 71-72, n. 159).

ここには「①言説の自性 (abhiilāpya-svabhāva)」と「②不可言説の事物 (nirabhiilāpyasya vastunah), ③不可言説を自性とするもの (nirabhiilāpya-svabhāva)」とが対比されている<sup>7)</sup>。②③は言語表現の基体であり、①は言語表現されたものを意味すると思われる。三性説にあてはめれば①は遍計所執性であり、②③は依他起性に相当すると筆者は判断する。が、Rospatt 氏はこの個所の “nirabhiilāpya vastu” を “inexpressible thing (nirabhiilāpya vastu, i. e. True Reality, tathatā)” と英訳する<sup>8)</sup>。つまり “nirabhiilāpya vastu” を真如、円成実性だと解釈されているようである<sup>9)</sup>。さて、②③に生滅が存在し無常であるためには「了知しない (aparijñāta, aparijñāna)」ことが前提条件とされている。ここには「一段低いレベルでは生滅があり無常だとされる」という見解が表明されていると思われる。では、もし②③を「了知」したならばどのような理解が得られるというのであろうか。

三 瑜伽行派における「不生不滅」 冒頭の『大乘莊嚴經論』では「諸法の不生不

滅]が帰結されていた。瑜伽行派における「不生不滅」の解釈については、『菩薩地』の以下の記述が参照されるべきであろう。

彼の諸の有情は、空性と結びついている、如来の説かれた甚深なる經典について、如来の意図の意味を了知しない。經典の中に「諸法は無自性である」と説かれ、「諸法は事物をもたず、不生不滅であり、虚空と等しく、幻や夢の如し」と説かれたが、彼〔諸の有情〕はそれら〔經典〕の意味をありのままに了知せず、心に恐れををいだし、それら經典に対して「それらは如来の説いたものではない」とあらゆる場合に誹謗する、かの菩薩は彼ら有情のために、導く方法に熟練すること（隨順會通方便善巧<sup>10)</sup>）によってそれら經典の意図の意味へとありのままに導き、そして彼ら有情を掌握する。是の如く〔菩薩は〕導く。これら諸法はそのようにあらゆる場合に存在しないのではない。それら〔諸法〕の言語表現を本質とする自性 (abhi $\tilde{$ lāpātmakaḥ svabhāva) は存在しない。それ故に〔それら〔諸法〕は無自性である〕と言われるのである。その言語表現されるべき事物 (abhi $\tilde{$ lāpya-vastu) は存在し、それを基体として言語表現が生じる。その言語表現によって自性は言語表現されるが、その〔言語表現された〕自性は勝義としては〔存在し〕ない。それ故に〔諸法は〕事物をもたない〕と言われるのである。そのようにまた、諸法の言語表現のそれらの自性も始めからあらゆる場合に存在しない。それらは何が生じ滅するのか。それ故に「不生不滅である」と言われるのである。(Dutt ed. pp. 180<sup>6</sup>-181<sup>2</sup>, Wogihara ed. p. 265<sup>3,23</sup>)

この個所には瑜伽行派の思想的特質がいかに主張されている。この記述が瑜伽行派の代表的な見解であったことは、Bhāvivekaによって『中観心論』第五章に瑜伽行派の前主張として引用されていることから理解されるであろう<sup>11)</sup>。ここで「不生不滅」とされているのは、先の記述で言えば①にあたる「言語表現を本質とする自性 (abhi $\tilde{$ lāpātmakaḥ svabhāva)」だけである。一方、②③に相当する事物 (vastu) については「生滅」とも「不生不滅」とも言及されず、無自性なのか無常であるのかは明らかにされないのである。

**四 依他起性は無自性なのか** 遍計所執性だけを「不生不滅」とし、依他起性については《一段低いレベルでは「生滅」》という『菩薩地』の苦肉の見解と、何の躊躇もなく「生滅」を根拠に依他起性の無自性を説き、「不生不滅」とする『大乘莊嚴經論』の記述とは明らかに温度差がある。この二つの文献の間には唯識説の導入や三性説の思想的変遷が存在したと予想されるが、いつの時点から依他起性が無自性とされ無常とされていったのかという問題が考察されなければならないであろう。

1) 瑜伽行派の生無自性については拙稿「依他起性と「生無自性」」『平井俊榮古稀記念論

集三論教学と仏教諸思想』（掲載予定）参照のこと

- 2) Sthiramati はこの個所を所謂「三無自性説」に結び付けて解釈する。O. Hayashima, Chos yon su tshol ba'i skabs or Dharmaparyeṣṭy adhikāra, pt. III, *Bulletin of Faculty of Education Nagasaki University*, 28, pp. 37-42. Vasubandhu の注釈には「三種の無自性性」という言葉があるが、そこには所謂「三無自性説」を説明しようとする意図は読み取れない。『阿毘達磨論』にも「有為の三相の無自性」の後に唐突に「三無自性説」が説かれる。Gokhale ed. p. 35<sup>15-20</sup>。また、この二つの偈は『摂大乘論』II.30にも引用される。長尾雅人『摂大乘論』上、1982年、p. 387 参照。ただし、『摂大乘論』には「三無自性説」は説かれない。
- 3) “kṣaṇabhāṅgārtho 'py anityārto veditavyaḥ paratantralakṣaṇasya”, Lévi ed, p. 149<sup>11-12</sup>
- 4) 早島理「無常と刹那一瑜伽行唯識派を中心に」『南都仏教』59, 1988年、他多数。
- 5) Alexander von Rospatt, *The Buddhist doctrine of momentariness*, Stuttgart 1995, pp. 71-78.
- 6) T. Tani, Logic and Time-ness in Dharmakīrti's Philosophy, *Studies in the Buddhist Epistemological Tradition*, Wien 1991, p. 391-392.
- 7) チベット訳はこの文脈を理解せず、①—③を全て「不可言説の自性」「不可言説の事物」と解釈している。このチベット訳では『菩薩地』の真意は伝わらない。byang chub sems dpas 'du byed thams cad mi rtag par\* ji ltar yang dag par mthong zhe na / 'di la byang chub sems dpas 'du byed thams cad kyi ①brjod du med pa'i ngo bo nyid rtag tu med pa kho nar\*\* dmigs nas / 'du byed thams cad mi rtag par mthang ngo // yang ②brjod du med pa'i dngos po nyid\*\*\* yang dag par yong su ma shes pa'i phyir / yongs su ma shes pa'i rgyu las byung ba'i skye ba dang / 'jig pa dmigs nas / ③brjod du med pa'i ngo bo nyid kyi 'du byed thams cad mi rtag par yang dag par mthong ste\*\*\*\*/ (D.ed. No. 4037, Wi, 146b<sup>2-3</sup>, P.ed. No. 5538, Shi, 166b<sup>3-5</sup>, \*P.ed. “pa”, \*\*P.ed. “rtag tu kho nar”, \*\*\*P.ed. “de nyid”, \*\*\*\*P.ed. “te”), 玄奘訳は正しく理解していると思われる。云何菩薩等、隨觀察一切諸行皆是無常。謂諸菩薩觀一切行①言説自性、於一切時常無所有。如是諸行常不可得。故名無常。又即觀彼②離言說事、由不了知彼真實故、無知爲因生滅可得。如是諸行③離言自性有生有滅。故名無常（大正30, p. 554a<sup>16-21</sup>）。
- 8) Rospatt, *op.cit.* p. 71<sup>12-13</sup>。そして以下の個所が“Cf”として脚注 (n.158) に挙げられる。「ここで菩薩は一切の言語表現を本質とする自性を遠離して、不可言説を自性とする事物を観察する。およそ何であれ心が安住すること、これが彼〔菩薩〕の空三昧と言われる (iha bodhisattvasya sarvābhilāpātmakena svabhāvena virahitaṃ nirabhilāpyasvabhāvaṃ vastu paśyataḥ yā cittasya sthitiḥ ayam asyōcyate śūnyatā-samādhiḥ /, Dutt ed. p. 187<sup>15-17</sup>, Wogihara ed. p. 276<sup>2-5</sup>) この個所には nirabhilāpyasvabhāvaṃ vastu という語句は存在するが、「生滅」や「無常」などとの関係は全く述べられてはいない。
- 9) また Rospatt 氏はこの記述について次のように理解されている。“this understanding of impermanence is only provisional and secondary to the realization of “inexpressible thing” (nirabhilāpya vastu), i. e. tathatā” (Rospatt, *op.cit.* p. 72<sup>8-10</sup>)。そして, “paśyati (i. e. direct vision)”, “samanupaśyati, which refers to a more indirect mode of observation (roughly: viewing something in a certain way)” の二つをそれぞれ “the parinīṣpanna level” と “the

*paratantra level*” とに配当し解釈する (Rospatt, *op. cit.* p. 72, n. 160).

- 10) この個所の「方便善巧 (ānulomikenôpāya)」については松田和信「菩薩地所説の ānulomikopāya について—三性三無性説との関連において—」『印仏研』28-2, 1980年, pp. 650-651 参照.
- 11) 「言語表現という本質について空であるゆえに諸存在は無自性である。そしてまた、まさにそれ故に [諸存在] は無生であるから不生不滅である (abhilāpātmaśūnyatvād bhāvānām niḥsvabhāvatā / tenaivacāpy anutpādād anutpannāniruddhatā // 69 / ), 言語表現をともなう事物は表現される通りに存在しない。それ故諸法は事物をもたない, 云々と多くのことが語られた (yato 'bhilāpavad vastu na tathā kathyate yathā / avastukatvaṃ dharmānām ityādi bahu coditam // 70 / ))」Lindtner ed. p. 56, 山口益『仏教における有と無との対論』pp. 500-501 参照.

〈キーワード〉『大乘莊嚴經論』, 『菩薩地』, 依他起性, 無自性, 無常

(駒澤短期大学非常勤講師)

### 新刊紹介

山上證道著

## ニヤーヤ学派の仏教批判

A5判・496頁・定価8,400円

平楽寺書店・平成11年2月28日